

九州産業考古学会報

第19号 2013年4月30日発行 発行元：九州産業考古学会

『日本の石炭産業遺産』を刊行して

徳永博文（志免町教育委員会）



2011年3月に起きた東日本大震災は、日本災害史の中でも重大な出来事であることに加えて、石炭産業史を学んでいる私にとっては、エネルギー史の中でも転機になると感じているところです。原発のあった福島県のいわき市には常磐炭田史研究会がありますが、2012年9月には、いわき市石炭・化石館で「世界記憶遺産『山本作兵衛コレクション』全国産炭地キャラバン展 in 常磐」を行うほどに復興しております。これは、福岡県田川市と全国各地産炭都市主催による世界記憶遺産活用活性化事業のひとつですが、こうしたお互いを理解し連携していく「絆」ができる動きが今後も継続するように望んでいます。

九州産業考古学会については、私の勤務先である志免町の旧志免鉱業所竪坑櫓の保存運動をしていただき、これはおかげさまで今では重要文化財となっています。「しめの文化財ウォーク（竪坑櫓と周辺の歴史を探訪するウォーキング）」にも毎回後援をいただいております、感謝しているところです。

さて私事ですが、昨年6月に『日本の石炭産業遺産』（弦書房）を出版しました。この出版が実現したのも、以前に九州産業考古学会編『福岡の近代化遺産』の執筆に参加させていただいたことがきっかけでした。拙著は、日本の近代化を支えた全国の石炭産業遺産を、13年間にわたって実地踏査した記録です。北海道、常磐、北部九州、沖縄県といった各地に残存している石炭産業関連施設を調査し、多くの写真で紹介しました。本書によって炭鉱そのものが文化であったことが理解され、鉄と石炭が国の屋台骨であった時代の歴史的研究に利用いただければ幸いです。

産業考古学は、産業遺産に基づいて技術文化を実証的に調査・研究するものです。その中でも九州の産業遺産を対象としながら、同好者を広く包含した「開かれた学会」が、私も末席に連なる九州産業考古学会です。私は今回の小著刊行に満足することなく、今後も学会の活動の裾野が益々広がっていくように微力を尽くす所存であります。

【報告】

TICCIH台湾本会議報告（その1）

市原猛志（門司麦酒煉瓦館）

アジア初の本会議開催となった国際産業遺産保存委員会(TICCIH)第15回本会議は、2012年11月4～11日の日程で台湾の国立台湾科技大学を中心に行われた。日本からは約30名の参加者があり、九州産業考古学会からは清水副会長、市原、清永の三名に加え、北海道産業考古学会山田氏など関連の方々も多く参加し、清水、市原は口頭発表も行った。本会議の様子や台湾の産業遺産について、今号と次号に分けて報告する。



写真1 TICCIH会場の国立台湾科技大学

1. 会議について

5、7、8日の3日に分けて行われた会議では、会議のテーマである

“Post-colonialism & Reinterpretation of Industrial Heritage (ポスト植民地主義と産業遺産の再解釈)”のもと、イングリッシュヘリテージ元総裁である Neil Cosson 卿や ホスト国からは Chao Ching Fu 教授、TICCIH 会長の Patrick Martin 氏、そして日本の産業考古学会長伊東孝氏によるキーノートスピーチを皮切りに、世界各

国における産業遺産の研究、保存活用に関して発表が行われた。

九州に関連したものでは、Neil Cosson 卿による九州・山口の近代化産業遺産に関する紹介、また清水副会長の“The Industrialization as a Latecomer – The State-Owned Yawata Steel Works comparing with Ham-yang and Tata”、市原が発表した“Research on the Characteristics and Investigational Techniques of Industrial Heritage in Kyushu Area / Japan”に加えて、鹿児島県から世界文化遺産課の職員が参加し、世界遺産構想に関する特別発表を行った。それぞれの発表自体は九州の産業遺産をアピールする絶好の機会ではあったのだが、質疑応答においてなかなかニュアンスを伝えることが難しく、語学力の重要性を改めて感じた次第である。



写真2 発表中の清水副会長

会議では、産業遺産の保存においてアジア各国で協力することの重要性を確認する

とともに、産業遺産研究組織のネットワーク化が必要という認識を共有することが出来た。8日にはTICCIH台北宣言も採択され、アジア初の本会議は盛会のうちに終わった。farewell partyの会場となった国立台湾博物館では、クラシック演奏とともに産業遺産保護と活用の新しい時代を予感することも出来た。今後連携と協力体制が進んでいくなかで、アジアでは台湾がリーダーシップを発揮することになりそうだ。



写真 3 farewell party 会場での京劇

2. TICCIH 日本委員会

TICCIHの参加・発表については、日本においては産業考古学会及び中部産業遺産研究会所属の会員である必要がある。ただ、海外から見ると産業遺産研究を行う研究者集団として窓口の一本化が重要であり、その受け皿としての TICCIH 日本委員会の設立が国内外からも求められていた。今回跡見学園女子大学種田先生の呼びかけによって同会の立ち上げを行った。5 日夜に発表者の懇親会をかねて崑山文化創意園区にて行われた会合では、種田先生を会長、今回急病によって不参加であった近畿大学岡田昌彰先生を副会長とすることで暫定的な了解を取った。

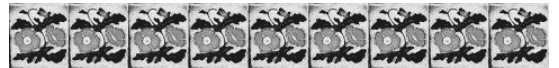


写真 4 崑山文化創意園区

TICCIH 本会議では、例年会議の前後に各種の産業遺産を巡るツアーが催される。これについては、次号にて詳しく紹介していきたい。



写真 5 TICCIH キーノートスピーチ会場



【報告】

長弘雄次・深町純亮両氏
米寿祝賀会に参加して

松田寛（会員）

2012年9月16日、飯塚市の「のがみプレジデントホテル」において、長弘雄次（九州共立大学名誉教授）・深町純亮（飯塚市歴史資料館元館長）御両人の「米寿を祝う会」

が行なわれた。両氏は我が九州産業考古学会の重鎮でもあるが、筑豊では知らぬ人のないこととて、会場に元内閣総理大臣麻生太郎衆議院議員や飯塚市長、嘉麻市長をはじめ、二百余名が祝賀に参集したさまは壯観であった。

長弘先生は、九州帝国大学工学部を卒業後、古河鉱業に入社、採炭技術者として33年間勤務された後、九州共立大学で15年間教壇に立たれた。大学を停年退職された後は、筑豊の産業遺産の調査と顕彰に尽力された。筑豊近代遺産研究会会長の重責も果たされ、その成果は同会編『筑豊の近代化遺産』(弦書房)として結実している。つい最近、これまでの石炭産業史研究の集大成として『筑豊の石炭に生きた日々の記憶』を刊行されたが、その旺盛な研究者魂と郷土愛には脱帽のほかない。

深町先生は九州帝国大学法学部を卒業して麻生鉱業に入社、本社事務幹部職や麻生病院(現麻生飯塚病院)事務長などを歴任された。退職後は飯塚市歴史資料館館長を務めるかわら、筑豊炭坑遺跡研究会事務局長として筑豊石炭産業史の研究を差配され、また頼まれて各地で行なった名調子の講演は数知れずという筑豊の名物男である。『炭坑節物語』(海鳥社)等いくつかの著書を出されているが、さらに諸論考を「筑豊学」として集大成される予定とのことである。

祝う会では、発起人代表の麻生泰・飯塚商工会議所会頭が、「長弘先生や深町先生のような歴史の語り部がいてくれたからこそ、石炭の暗いイメージが払拭され、筑豊はよみがえった。お二人の元気を継承して伝えていくのが、われわれ現役の責任だ。」と挨拶された。そのあと発起人会は両氏に敬意を表し、深町先生には「石炭翁」、長弘先生には「炭坑翁」の称号を謹呈することとし、

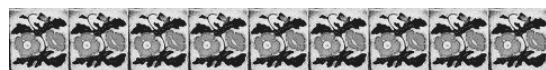
麻生太郎衆議院議員から称号状と記念品が贈られた。

これに対して深町先生は「筑豊を愛する心は私の中に染み付いている。余命の限り、地域の良さを語り伝えたい」と、長弘先生は「近代化遺産の調査・研究を続け、地域活性化に尽力したい」との謝辞を述べられた。

御両人を中心に宴会は和やかに進められ、最後に出席者が炭坑節を踊って会はお開きとなった。御両人並びに発起人が、出入口で参会者一人一人に丁寧にお礼されていたことが印象的であった。筑豊石炭産業史研究の双璧をなす御両人のこれからも変わらぬ御健康と御活躍を祈念するとともに、後進の不肖私も研究に邁進しなければならないと心に誓ったことであった。



写真 米寿を祝う会会場



【書籍紹介】

長弘雄次著

『筑豊の石炭に生きた日々の記憶』

木元富夫(顧問)

会報本号の深町・長弘御両人米寿祝賀会報告にある長弘雄次氏の論文集をもう少し詳しく紹介したい。『筑豊の石炭に生きた日々

の記憶～筑豊炭田開発技術史論文選集～』という書名の通り、九州帝国大学工学部採鉱学科の最後の卒業生として昭和 22 年に古河鉱業に入社して以来、会社人として身をもって炭鉱の盛衰を見、定年退職後は大学人として炭鉱技術史の理論的総括に取り組まれ、その退職後は郷土筑豊の活性化に先頭に立って活動されているという、蒸気機関車のようにたくましい、小会の大先達でもある長弘氏が、見て考えて行動してきた記憶と記録の集大成である。

内容は、第1編筑豊の炭坑に生きる、第2編近代日本を創ったエネルギー基地筑豊の近代化産業遺産、第3編筑豊炭田開発(採掘・採炭・土木・運輸)技術の史的研究、と巻末年表から構成されているが、本書の魅力は、氏自身が見聞き体験し調査したことを基に書かれた個人史、研究史であると同時に、それがそのまま戦後筑豊炭鉱史に重なっていることである。特に巻頭の「我が石炭生産に従事した頃～炭掘りし日々の記録～」は、公私にわたる炭鉱の生活や心情が綴られており、炭鉱の記憶が薄れつつある今日、後進の我々にとって得難い内容となっている。大判の本書には、著者が集めた貴重な図面や写真が多く配置され、石炭のみならず筑豊の産業史に興味を持つ者には必携の書となっている。

地方出版ということでいささか入手しにくいのが惜まれるが、飯塚市内の元野木書店と紀乃国屋書房で販売されている。本体 2300 円。また遠隔地の方は、版元のフジキ印刷(電話:0948-29-3177)に照会されたい。本書は限定出版であるので、早めに注文されることをお勧めする。

【お知らせ】

平成 25 年度総会・見学会開催について

今年の総会は、久々に北九州市内で開催致します。JR 門司駅すぐと交通の良い門司赤煉瓦プレイスでの開催となっています。見学会も見場所が多く、多くの皆様の参加を心よりお待ち申し上げます。

日時：平成 25 年 6 月 30 日(日) 10 時 30 分～17 時

会場：門司赤煉瓦プレイス・赤煉瓦交流館会議室

(北九州市門司区大里本町三丁目 11-1、JR 門司駅より徒歩 3 分)

総会・研究発表大会 10:30～12:00

◎研究発表 3 名を予定

(ひとり 20 分以内・発表者受付中)

見学会 13:00～17:00

門司食糧倉庫やニッスイパイオニア館ほか、北九州市内を中心に多くの施設見学を予定。

(マイクロバス定員の都合で、先着順で受け付けています)

連絡先：砂場一明(事務局)

電話 0940-36-5501

E-mail k-sunaba@jcom.home.ne.jp



写真 門司赤煉瓦プレイス(総会会場)

◇◇会報原稿募集（会員外でも応募できます！）◇◇

『九州産業考古学会報』への積極的な投稿をお願いします。募集原稿は【報告】（700字～1400字程度）や【研究発表】（1400～2800字程度）、【お知らせ】（400字以内）など。いずれも図表を入れる場合文字数要調整。また紙面の都合上、文面レイアウトに関して編集側で変更する場合があります。投稿に関する詳しい情報は学会ウェブサイト及び事務局まで。

■■会報第19号・目次■■

【巻頭言】

『日本の石炭産業遺産』を刊行して
……………徳永博文 1

【書籍紹介】

長弘雄次著
『筑豊の石炭に生きた日々の記憶』
……………木元富夫 4

【報告】

T I C C I H台湾本会議報告（その1）
……………市原猛志 2
長弘雄次・深町純亮両氏
米寿祝賀会に参加して…………松田寛 3

【お知らせ】

平成25年度総会・見学会開催について
…………… 5
今後の予定 …………… 6
会費納入・ご寄付のお願い …………… 6

今後の予定		会費納入・ご寄付のお願い
5月	産業考古学会年次総会 （東京海洋大学）	当会は年会費を個人会員2000円、団体会員は5000円それぞれ徴収しています。当会の趣旨をご理解頂き、会費納入或いはご寄付の程、どうぞ宜しくお願い申し上げます。 会費納入・寄付先口座（一覧） ・ゆうちょ銀行 17430-88882241 キュウシュウサンギョウコウコガツカイ ・福岡銀行大牟田支店（店番691） 普通 1914369 九州産業考古学会
6月	年次総会（門司）	
7月		
8月	会報20号発行	
9月		
10月	産業考古学会全国大会（富山市他）	

<編集後記>

春は人事異動の季節でもある。新しい環境となり、また職場自体も移られている方がこれを読まれている方の中にもいるのではないだろうか。個人的にはこの4月より北九州市門司麦酒煉瓦館の館長職を拝命している。施設の運営は全く一からの仕事であり、慣れないことも多いが、ぜひ一度足をお運びいただければ幸いです。（市原）

九州産業考古学会事務局 〒811-3430 福岡県宗像市平井二丁目12-1 砂場一明 気付
 TEL&FAX：0940-36-5501 E-mail：k-sunaba@jcom.home.ne.jp URL：http://kias.kilo.jp/index.php/
 学会ML希望者は、上記アドレスもしくはWeb担当者(iota_titanus@yahoo.co.jp)まで連絡願います。